

漱

石

と

食



第1部

講演

I.「漱石は愉快だ」 作家・国文学者 林 望

II.「料理書でひもとく
明治・大正期の食生活
～漱石が生きた時代の食を探る～」
梅花女子大学准教授 東四柳 祥子

第2部

シンポジウム

「漱石と食」 染谷 省三(株式会社中村屋取締役相談役)
林 望・東四柳 祥子・新宿区長 吉住 健一
コーディネーター: 牧村 健一郎(元朝日新聞記者)

◆司会: 岩田 理加子(朗読: ふみの しおり)



平成29年 2月5日 日 14:00 開演 (13:15 開場) 四谷区民ホール
(新宿区内藤町 87 四谷区民センター 9 階)

主催



共催

朝日新聞社

▶新宿区公式 HP <http://www.city.shinjuku.lg.jp/>

▶記念館 HP <http://soseki-museum.jp/>



平成29年9月24日 漱石山房記念館開館に向けて 新宿区夏目漱石記念施設整備プロジェクト Vol.8

「漱石と食」の開催にあたって

夏目漱石記念施設整備プロジェクトVol.8～漱石と食～にご来場いただき、誠にありがとうございます。

文豪・夏目漱石は、大の甘党だったことが知られていますが、今回は、漱石や漱石文学に密接な「食」に焦点をあて、第1部で作家・国文学者の林望さんと、梅花女子大学准教授の東四柳祥子さんにご講演いただきます。そして第2部では、第1部出演のお二人に、株式会社中村屋取締役相談役・中村屋サロン美術館館長の染谷省三さんを加え、漱石文学に出てくる食べ物や食に対する思い入れなどを語っていただきます。

新宿区は、新宿ゆかりの漱石が晩年の9年間を過ごし、数々の名作を世に送り出した新宿区早稲田南町7番地の「漱石山房」跡地に、漱石生誕150周年にあたる平成29年9月24日の開館に向けて、新宿区立漱石山房記念館の整備を進めています。

記念館の整備にあたり、全国の皆さまのご支援をいただきたいと考え、平成25年7月より「夏目漱石記念施設整備基金」への寄付の受付を開始いたしました。これまでに多くの皆さまからご厚志をお寄せいただき、心より御礼申し上げます。開館に向けて、引き続き皆さまの温かいご支援・ご協力をお願い申し上げます。

本日は、最後までごゆっくりお楽しみいただき、漱石の生きた時代の食文化や記念館整備に思いを馳せていただければ幸いです。

新宿区長 吉住 健一

◆ 来賓者挨拶 新宿区議会議長 下村 治生



芋坂の羽二重団子
(荒川区東日暮里)

「主人は芋坂の団子を喰って帰って来て、相変わらず書斎に引き籠るる」

「吾輩は猫である」

「余は凡ての菓子のうちで尤も羊羹が好だ。別段食いたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ」

「草枕」



牛鍋屋の客「安愚楽鍋」から 仮名垣魯文著
明治4年(国立国会図書館蔵)



洋食を囲んで家族団欒「衛星と衣食住」から 福田琴月著
明治44年(国立国会図書館蔵)

第1部

講演「漱石は愉快だ」

作家・国文学者 林 望

漱石の人格や作品に大きな影響を与えたイギリス留学。『イギリスはおいしい』の著者で国文学者の林望氏に、漱石文学との出会いや、イギリスの食事情、漱石と俳句など、縦横無尽に語っていただきます。



Profile

昭和24年東京生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程満期退学。ケンブリッジ大学客員教授、東京藝術大学助教授等を歴任。『イギリスはおいしい』で日本エッセイスト・クラブ賞、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』(P・コーニツキと共著、ケンブリッジ大学出版)で国際交流奨励賞。平成15年放送のNHK BS番組「ロンドン・漱石・百年の憂愁」では案内役を務める。平成18年『リンボウ先生が読む 漱石「夢十夜」』(CDブック)を刊行。近年は古典評解書を多く執筆。『薩摩スチューデント、西へ』『旬菜膳語』『能の読みかた』等著書多数。『譚訳源氏物語』全十巻で毎日出版文化賞特別賞受賞。第一句集『しのびねしふ』、最新刊『譚訳平家物語』全四巻(祥伝社)

講演「料理書でひもつく明治・大正期の食生活 ～漱石が生きた時代の食を探る～」

梅花女子大学准教授 東四柳 祥子

漱石が生まれたのは明治維新の前年(慶応3年)。その人生は日本人の食生活が劇的に変化した明治・大正時代と重なります。この時代の料理本研究者である東四柳祥子氏に、今に通じる食文化史を分かりやすく解説いただきます。



Profile

梅花女子大学食文化学部准教授(専門分野:比較食文化論) 国際基督教大学大学院比較文化研究科博士後期課程を経て、平成24年4月より現職。農水省「特定農林水産物等の名称の保護に関する法律」に基づき意見を聴取る学識経験者会合「総合検討委員、和食文化国民会議幹事、(一社)日本家政学会食文化研究部会常任委員、日本郵便「和の食文化」シリーズ記念切手」助言・監修など。主な著書に『近代料理書の世界』(共著)、『日本食物史』(共著)、『日本の食文化史年表』(共編)、*Japanese Foodways Past and Present* (共著)などがある。

第2部

シンポジウム「漱石と食」

新宿区の食を語るとき新宿中村屋は欠かせません。漱石が東京帝国大学で教えていた頃、パン屋として本郷で創業し、その後現在地に移転します。また荻原碌山をはじめとする多くの芸術家を支援した中村屋サロンも有名です。第1部のご講演者に中村屋前社長の染谷省三氏と新宿区長を加え、日本人の大好きなカレーや菓子パン、和菓子など、また漱石文学に出てくる食べ物についてお話いただきます。

■ 株式会社中村屋取締役相談役 染谷 省三

昭和43年株式会社中村屋に入社。取締役経営企画統括部長、取締役菓子事業部統括部長、取締役兼常務執行役員などを経て、平成21年代表取締役社長に就任。平成27年から現職。中村屋は、明治34年本郷の東京大学正門前でパン屋として創業。明治42年に新宿区の現在地に移転。日本で初めてクリームパンや純印度式カレーを販売。また明治から昭和初期にかけて多くの芸術家が集い、後に中村屋サロンと呼ばれ、日本近代美術史にその名を刻んでいる。



■ コーディネーター

ジャーナリスト(元朝日新聞記者)

■ 牧村 健一郎

昭和26年神奈川県生まれ。朝日新聞記者。早稲田大学政経学部卒。朝日新聞社入社後、校閲部、アエラ編集部、学芸部、文化らし報道部be編集部を経て、現在フリーに。著書に『新聞記者夏目漱石』『旅する漱石先生』など。



■ 林 望 ■ 東四柳 祥子 ■ 新宿区長 吉住 健一



アイスクリーム製造器「食道楽」から 村井弦斎著

明治36年(国立国会図書館蔵)

※漱石山房にもあって、漱石や子供達の好物だった



新宿移転当時の中村屋

明治42年(中村屋提供)



昭和初期の中村屋喫茶部インド間

(中村屋提供)

「命は食にあり」

胃弱なのに大食漢。ジャムや砂糖を舐めるほどの甘党。そんな「吾輩は猫である」の苦沙弥先生の姿は、そのまま漱石の姿でもある。

漱石は自身の嗜好について、談話「文士の生活」のなかで「濃厚なものもいい。支那料理、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思わぬ」と言及している。さらに、正岡子規宛ての手紙では「たら腹主義を実行せし時こそ愉快なりしか」（明治二四年七月九日付）と、およそ胃病を患う人間とは思えない発言も飛び出す。

酒を飲まない代わりに甘味を好んだ。本人は「有れば食うと云う位で態々買つて食いたいという程では無い」（「文士の生活」と言うが、ビスケットが好物。鏡子夫人に止められることもしばしばあった。甘いものを控えるようたしなめられる明治の文豪の姿には、甘党ならずとも親近感を抱くのではないだろうか。

「食」への興味は日記やメモに詳細に記し、食べ物を送ってくれた人物には丁寧な礼状で感謝の意を表すことを忘れなかった。教子でドイツ語教師の林久男がザポンの砂糖漬けを送ってきたときには、「あのザポンの砂糖漬の偉大なるには驚き候。西郷隆盛の砂糖漬のようなものに候」（明治四二年五月七日付）としたためた。こうした素直な感想を受け取った贈り主は、次はどう趣向を凝らそうかと思いを巡らせたであろう。

一方、自ら宴席を設けて客をもてなすこともあった。明治三八年二月二五日、漱石の発案で高浜虚子や寺田寅彦らを招き、好物の牛鍋を囲んで「食牛会」が開かれた。寅彦が持参したビールが賑わいを添え、気心の知れた面々は早稲田南町の漱石山房で深夜まで話を弾ませたのだった。

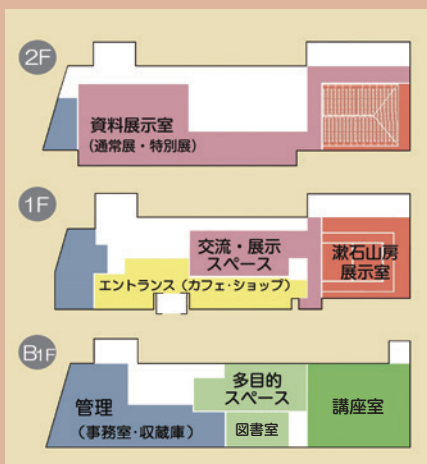
晩年の転機となった「修善寺の大患」（明治四三年）後、入院中の漱石は日記に「命は食にあり」と記している。生死の境をさまよひ、治療のため満足に食事のとれない漱石にとって実感にあふれた言葉だったに違いない。臨終直前、漱石最後の望みは「何か食いたい」だった。気つけのぶどう酒を口に含み、「うまい」という一言を遺してこの世を去ったという。波瀾に富んだ人生を締めくくったひと匙の酒は、漱石にどのような余韻を与えたのだろうか。

(記念館イメージ)



ともに創ろう、 漱石山房記念館

平成 29 年 9 月 24 日の開館に向け、記念館の整備を進めています。



- 施設概要
 - 所在地 新宿区早稲田南町7番地
 - 延床面積 1,276.14㎡
 - 構造 鉄筋コンクリート造 (一部鉄骨造)
 - 地上2階、地下1階
 - 敷地面積 1,114.79㎡
- 開館時間
 - 午前10時から午後6時まで
- 休館日
 - (1) 月曜日、ただしその日が休日の場合は、直後の休日でない日
 - (2) 12月29日から翌年1月3日までの日
- 観覧料 (通常展開催時)
 - 【一般】300円
 - 【小学生・中学生】100円
 - 【団体(20人以上)】個人の観覧料金の半額

夏目漱石記念施設整備基金にご支援・ご協力をお願いします

新宿区では、記念館の整備に多くの方々のご参画をいただきたいと考え、「夏目漱石記念施設整備基金」を設置、平成25年7月から寄付の募集を開始し、約9,619万円(平成29年1月18日現在)のご寄付をいただいております。ご厚志をお寄せいただきました皆さまには心より御礼申し上げます。引き続き、皆さまの温かいご支援・ご協力をお願いいたします。基金への寄付方法など詳しいことは、新宿区文化観光課文化資源係まで。

「新宿区立漱石山房記念館」ホームページ
(<http://soseki-museum.jp/>)
を開設しました。

記念館の施設概要、イベント情報などを随時更新していきます。どうぞご覧ください。

問い合わせ先

新宿区文化観光産業部 文化観光課 文化資源係

〒160-8484 新宿区歌舞伎町 1-5-1 電話 03 (5273) 4126 〈直通〉